



リスクのある人生にこそ面白さがある

株式会社日本コンピュータ開発 相談役最高顧問 高瀬 拓士

1. はじめに

少子高齢化の中で、数少ない貴重な子どもたちが、目的は曖昧なまま進学を目指し厳しい受験勉強に励む。しかしながらいったん希望校に入学した途端に取組むべき目標を見失い、無気力な5月病にかかる者が多いと聞く。受験までにエネルギーを使い果たし、入学という手段と、学ぶという目的を混同し、入学後は勉学への意欲は乏しく、それでも容易に得られる学歴というレッテルの力に期待し、人材確保に苦しむ中小企業へは目もくれず、ただ面白さ、好き嫌い、安心安定だけを求めてだれもが大企業や公務員を目指す。そこには若者らしい夢や希望、挑戦する勇気や好奇心、逞しい精神力や社会に飛び出して行くという勢い、躍動感を感じられない。最高学府たる大学で最先端知識や技術の詰め込みは行っても、基礎学力や人間力、社会性などを身につけることも無い。これから生きて行く社会や人生に対する関心は薄く、ただなんとなく、あるいは自分に都合の良いように社会や人生を勝手に想像して社会に出てくる。その結果、現実とのギャップに直面して挫折し、迷い、自信をなくして無気力になり、社会に失望して自ら人生を絶つ若者さえも居る。あたかも闇夜に、ヘッドライトも無い高性能オートバイで飛び出し、事故を引き起こしている様なものとも言える。私はこのような行動を見て「若者達は間違っている」と思うことが多い。しかしながら間違っているのは悪いのは彼らではなく、彼らをまともに育てて居ない大人達だと思っている。

最近発掘された数千年昔の遺跡で、「近頃の若い

者達は・・・」と書かれたものが発見されたという。今も数千年前も、大人達は若者を同じ様に見ていたのだろう。しかし日本には昔から「子どもは親の背中を見て育つ」という言葉がある。子どもたちは大人達の背中を見て学び、育ち、教育をされ、一人前の大人、社会人になって行った歴史がある。そういう視点で考える時、「現在の大人達は、子どもたちにその背中を見せているだろうか？」という疑問が湧く。もっと深刻なのは「子どもたちに見せるべき背中があるのだろうか？」ということである。物質的豊かさの追求に明け暮れ、その豊かさにどっぷり浸かって生きてきた結果、自己中心的で社会性や自らの社会参加意識に乏しく、自信もなく、自主自立意識や意欲もなく社会に依存して生きる、見せるべき背中を持たない大人が増えているのではないだろうか？ そのようなことで子どもたちは大人、社会人になれるのだろうか？

私は高等教育以前の問題として、大人達は子どもたちに対して、良くて悪くても自分の背中、つまり自分の生き様をさらけ出して見せ、社会を、人生を学ぶ為の教材として提供することが大切だと思う。そこで初めて子どもたちは人生や社会を理解するためのヒントを得て、社会に出るに当たって自分なりの目標や覚悟ができるのではないだろうか？

生まれて74年、社会に出て55年を生きてきた私。その間運命に従ってこの年代の人間には珍しく、大企業から倒産寸前の中小企業など3つの会社を転職し、言葉も話せず、知識も経験も無いまま会社つくりアメリカに飛び込み悪銭苦闘もした。その様な私の人生を知る友人や知人には、私の人生を「運が悪く、波乱万丈の人生」と評する人が多い。確かに

「リスクの多い人生だった」かもしれない。しかしながら私の人生は「実にバラエティに富んだ、思い出多く楽しい人生だった。その人生に悔いはない」と言える。そして今も楽しく生きている。

この寄稿は、大人の背中の一例として私の生きてきた跡を振り返り、そこで学び気づいたことなどを纏めて提供するもので、次代を担う若者達にとって社会や人生を考え学ぶに当たってのキッカケや一助となり、同時に、若者達を指導育成する立場の方々にとっても参考になれば幸甚である。

2. 私の歩いた道

2.1 生立ち

1939年、私はあの太平洋戦争勃発直前、大分県の片田舎、町部から徒歩で30分以上も山道を登った、狭い平地を24戸で分け合い細々と生計を立てる集落の貧農で、10人兄弟姉妹の下から2番目、3男として生まれた。敗戦の翌年に国民学校（小学校）へ入学したが、新生入と言えども学生帽はもちろんのこと、ランドセルも学生服も買って貰えず、履物は兄や姉達が自宅で取れた藁で作ってくれた藁草履を素足で履き、真冬には霜焼けやあかぎれで足の指を真っ赤にしながら、石ころでゴツゴツした山道を1時間近く歩いて通学した。日頃は何も買ってもらえなかったが、正月が来ると、時には足袋、時には下駄などを買ってくれた。この一年にたった一回のことで幸せを感じ、心をわくわくさせながら、毎年首を長くして正月を待った。たまに親が要求を聞かないと切れてしまう現在の、この豊かな時代の子どもたちに比べて、一年に一回の小さなことでも喜び、幸せを感じる事が出来たあの時代の子どもたちは、貧しくても不幸ではなかったと言えよう。貧しい時代に貧しく育ててくれた親兄弟に感謝したい。

そうして中学校に進み高校進学準備が始まった頃、私は進学高校に進み東京の大学を目指すことに決めた。ところがこの話を聞いた歳の離れた次兄に「子だくさんで高校にすらやれるかどうかかわらない貧しさの中で、普通高校を経て大学に進学するのは何事か！」としかられた。日頃の生活状態から家

が貧しいことは十分知っていたが、学校に進むことで親が苦勞するというには全く気づかなかった。その場で普通高校ではなく職業高校に進学し、一日も早く就職して家を離れ、親の負担を軽減することに決めた。そこで、当時この学校を卒業すれば日本のどんな大企業にも就職できると評判の県立大分工業高校電気通信科への進学を決め、厳しい入学試験を突破して入学した。通学には駅までの山道徒歩や、窓を開けると煤煙で真っ黒になる蒸気機関車に引かれる汽車で、片道2時間もかかった。

2.2 就職

高校3年、いよいよ就職の時期を迎えた。「もっと勉強をしたい。しかしこのまま大分に残ったのでは二度と勉強の機会はない。ここまでは親のお世話になったが、これから先は自分の力で勉強するしかない。そうだ、就職は都会へ行こう、大企業へ行こう。都会なら勉強のチャンスが、大企業なら社内教育制度にめぐり会えるかもしれない。日本のどんな大企業にでも就職できると言われるこの学校だ。」そこで自信を持って大都会東京、日本一の大企業日立を受験した。そして幸運にも、全国から高卒男子40人しか採用しない日立の通信機部門工場への入社試験に合格した。九州からの入社同期生は佐賀県の有田工業高校電気科卒業生と二人だけだった。親元を一度も離れた事のない自分にとっては大変な決断だった。こうして未だ18歳の1958年4月、「生き馬の目さえくり抜くような怖い東京に出て行くのか？」と心配する母親の元を離れることになった。当時、大分から東京に行くというのは、今の外国に行くより遥かに大変な別れだった。

2.3 社会人としてのスタート

どんな大企業にでも入社できる高校を卒業したという自信と、日本一の大企業日立に入社したという期待に胸を膨らませ、入社した横浜市にある日立の通信機関係専門工場、学校で勉強した電気通信関係の仕事が出来ると期待し配属発表を待った。ところが配属されたのは、驚いたことに学校で習ったことも、聞いたことさえも無い、社内でも最先端の技術開発部門コンピュータ設計課。しかも同期で配属された新入社員3人の内、高校卒は自分だけ。他

の二人は東工大卒，東大大学院修了。職場の先輩達も東大，京大，阪大，東北大卒，主任は九大大学院修了，課長は北海道大卒という，旧帝大卒ばかり。どんな大企業にでも入社できる大分工業高校卒などとうぬぼれていた田舎者に，「これが大都会だ，これが一流企業だ」という社会の広さ，すごさ，田舎者の無知を実感させられた瞬間だった。そして給料だけでなく，生活空間である独身寮でも，大卒は気密の良い鉄筋一人部屋，高卒は隙間風も吹き込む木造4人部屋という，学歴による処遇の差を思い知らされた。しかもコンピュータ関係の仕事は，携わる者皆が初めて取組む仕事。学びながら，調査研究しながらの試行錯誤，悪戦苦闘で連日連夜の残業続き。深夜の帰寮も珍しくなかった。それでも日本の将来にとってきわめて重要な先端技術開発にかかわっているという使命感と充実感に支えられ，苦勞をものともせず皆よく働いた。

一方で初の親元を離れた寮生活に，時々故郷や親兄弟が思い出され寂しくなった。そんな時決まるところがあった。それは窓の向こうに東海道線の電車が見えるトイレだった。そこに行けば，一日一本，東京駅午前11時発大分方面行，唯一の急行列車‘高千穂号’が見える。幾度となく「あれに乗れば懐かしい大分に帰れる」と思ったものである。

2.4 すばらしい社内教育への出会い

そうして一年経ったある日，日立は社内教育として大学並教育を目指した工業専門学院の開校を発表した。専門科目は東工大，文系科目は横浜国大の著名な教授陣を社外講師として迎え，学費は無料，学生は全寮制で通学時間はゼロ。社員として給料もボーナスも貰いながら，勤務時間と同じ毎日8時間の授業。もちろん社員だから春休みも夏休みも無い。当時の貧しさから，学力は有っても大学への進学が出来ず，高卒として入社した多くの社員はもちろん，入社後夜間や通信教育を通じて大学教育を学んだものの社内では大卒並処遇を受けない人達も，皆受験勉強に走りこの入学試験に殺到した。就職時期待した社内教育にやっと出会ったにもかかわらず，毎日の残業続きで受験勉強時間がままならない私は入学をほとんど諦めて居たが，入学試験結果発

表を見ると合格者名簿の中に自分の名前があった。電子工学科は，全国にある日立全事業所からわずか40名の入学。学生には最年少の私たち20歳が居れば，最高齢者は27歳。流暢に英語を話す人も居る。受験勉強不足の私はそのすごい学生達に圧倒され，授業についていけるかどうか心配しながらも，とにかく夢中で勉強した。そして卒業が近づいたある日，教務室に呼び出された。これは落第に違いないと覚悟して教務課長の席に行った。そこで告げられたのは意外にも，「この学校に研究科を設け，クラス当たり二人だけ進学させるが，その内の一人として君を選ぶ」というもの。その結果，この学校には態勢整備はせず，一人は東工大，私は東大の著名な教授の研究室で教授に師事，大学院生達と接しながら，テーマを持って研究生生活をするようになった。こうして通学費から授業料まですべて日立負担で，あの中学時代にあこがれた大学で学ぶ機会を与えられた。貧しさ故に進学を諦め，就職しては学歴差に打めされ，そういう悪戦苦闘の最後にすばらしい機会を与えられ，だからこそ一生懸命に勉強した。そのことに満足するとともに，古き良き時代の大企業に心から感謝したものである。

2.5 初めてのアメリカ

学業を終え，再び元のコンピュータ開発設計部門に戻った。そんなある日，入荷が滞った輸入部品買い付けの為，購買担当課長がアメリカへ出張することになった。私はその技術的支援役として同行するように，上司である設計部長から海外出張命令が出た。30歳にして初の異文化体験は，ただ驚きの連続であった。まずその大陸の巨大さ。西のサンフランシスコから東のボストンまで大陸を横切る飛行時間は，太平洋を渡る時間の半分ほどかかる。上空から見下ろす地上はどこまでも荒れた砂漠のように見える。2月のボストンは大雪だったが，南のフロリダに飛んだら，始めて見るビキニ姿の女性がホテルの屋外プールで泳いでいた。テキサスの会社を訪問したら，金網のフェンスで囲った広大な工場敷地の入り口では，拳銃を腰につけた守衛がデンと椅子に構え，こちらをじろりと見る。夕食のため訪問先の車で案内されたレストランは，巨木のようなサボテ

ンが至る所ニヨキニヨキと立つ砂漠の中。カウボーイ、カウガール達が、屋外にある巨大なバーベキュー炉で焼いて持ち込む巨大な焼肉が、テーブルの上に置いたお盆のようなお皿からはみ出す。それを砂漠に沈む真っ赤な太陽を眺めながらかぶりつく。とにかく広大で巨大なアメリカは、すべてにおいてスケールが違う。「日本はよくもこのような国と戦争したものだ。無知ほど怖いものは無い」という実感であった。

私はこの時の体験から、社員には出来る限り若い内に異文化体験をさせたいと考え、現在の会社に入社以来すでに20年以上にわたって、レンタカーに乗れる範囲の少人数の社員を、毎年2回、12-3日間のアメリカ体験旅行に連れて行っている。

2.6 初めての転職

・大企業から倒産の危機にある中小企業へ

日立に入社して14年が過ぎすでに32歳。経験を積み主任となって6年目だったある日、突然日頃直接話をする事もない‘偉い人’工場長に呼ばれた。何事かと駆けつけると、「京都にあるハイテク会社の社長が来て経営支援要請があった。支払金の前倒しや単価調整かと思ったら、いきなり君を指名しての転属要請だった。どうする?」というもの。そこで私は、「輸入部品国産化に当たって国内に十分な技術がなかった時、偶然このベンチャー企業と出会い、その会社の製品を積極的に購入することを通じてこの会社を育て国産化に成功し、最近ではその会社総売上の80%を日立が買っていたこと。それがドルショックという世界的景気混乱の中で、日立の購入が大幅に減少し経営が苦しくなっていること。そこでこの会社を育てた立場の自分に、社長から直接転職の誘いがあったが、この会社の経営姿勢が好きで興味はあるものの、高卒の自分を大学教育までしてくれた日立を飛び出すわけにはいかないと断った」などと正直に説明した。その結果、「君が本気で希望するなら転職を許可しよう。しかしながら年商以上の銀行借金を抱え、今にも倒産しそうな会社だから、日立はやめずに籍を残し、倒産したら日立に帰ってこい」との条件つきで許可が出た。私は、この会社は資本的つながりも無い会社だから、転職

するなら危険があっても日立を退社してから転職する積りだったが、日立という大企業の、予想外の配慮に驚いた。

しかし転職して1年、企業文化の違いに面食らいながら、未だ立ち直りの兆しも見えない悪戦苦闘の中で、私はこの会社の取締役役に選任された。そこで「役員になってまで、自分だけは倒産した時の逃げ場所を確保しているというのは自分の信条に合わない」と日立に退職を申し出た。そして完全に日立の籍から離れて数ヵ月後、オイルショックによる世界的な経済混乱で、経済社会は再び先行き見通しも立たない大不況に落ち込んだ。企業文化の違いに面食らって一向に改革の成果が上がらず、役員会では常に非難の集中砲火を浴びる中での大不況。まさに悪戦苦闘の連続だった。そんな私に対して日立の人達は、すでに退社しているにもかかわらず、暖かいアドバイスなどの支援をしてくれた。そしてこの会社へ転職して6年後、工場の生産性は10倍にもなり、会社は見事に立ち直った。

2.7 現地企業起こしにアメリカへ

・知識も経験も無く、言葉さえも全く話せないで単身渡米

1979年、会社が元気になったある日、善意だが超ワンマンである社長に呼ばれ、次のように告げられた。「ハイテク技術をさらに磨くこと、さらに広いハイテク商品マーケットを求め海外進出をする。進出先はアメリカで、君がその担当者として直ちにアメリカへ行け」というもの。私は英語が最も苦手。会話など全く出来ないだけでなく、読むことさえほとんど出来ない。会社づくりの知識も経験も無い。あの日立時代に上司からアメリカ出張を命じられた時、海外出張規程に定めた英検2級以上の資格を持っていないことで、総務部門から海外出張まかりならないという横槍が入った経験さえある。それなのに、この会社はすでに40歳の私に会社づくりに行けという。「一体何故私が?」という質問に、「君は日立時代に当社製品の使い方を開発してくれた。この会社では工場長として、製造の仕方も知っている。両方共わかる者は、君以外に当社に居ない」という。そして航空券を手配し、3,000ドルの現金と

当時自分では見たことも無いクレジットカードを渡され、「日本人が少ないので、日本人に対する先入観が無く、かつ教育レベルが高いミネソタに行け」ということになった。社長命令に従って、自信も知識も経験も、能力も無いまま、私は初めて単身で、異文化の国アメリカへ会社つくりに行くことになった。サンフランシスコでミネソタ行の飛行機に乗り換えるだけでも精いっぱい。ミネソタへ到着してハタと気づいたことは、「そうだ、今夜のホテル予約が無い」ということ。言葉は通じない。知人も居ない。ホテル予約の仕方也不知道。それでもどこかに泊まるしかない。空港職員を捕まえて手ぶり身振り、辞書の単語を並べるなどあらゆる方法でホテルが必要なことを訴え、やっと確保してタクシーで送り届けて貰った。それでも確か一泊のみの予約と聞いた様な気がするが、言葉が通じないことを良いことに一週間居座るなどの無茶を繰り返しながら、一ヵ月間に渡ってホテルを転々とした。そしてやっとワンベッドルームのアパートを見つけて入居。それから知識も経験も無いまま活動を始め、通算6年の間に、会社の設立、営業活動、輸入販売、工場建設、製品開発などに挑戦し、最終的には110人ほどのアメリカ人を採用する優良企業に育った。

この詳細はページの都合でここでは割愛するが、当社ホームページ <http://www.nck-tky.co.jp> のコラム欄に「成果は後から付いて来る」というタイトルで掲載されている。

2.8 再び転職

家族を連れて家まで買って、定住も覚悟して通算6年間滞在していたある日、日本からミネソタの自宅へ電話がきた。電話の主は、今は日立の幹部、日立時代にお世話になった当時の上司である。そして「一日も早く帰国しないか？」という。その状況に何か有りそうな予感がしていったん帰国した。そこでこの日立の孫会社の位置づけで設立した(株)日本コンピュータ開発の存在と、その初代社長が日立時代の職場の先輩であることを教えられ、今病気で入院しているから見舞いに行くようにと勧められた。早速病院に見舞いに行くと、社長は癌の手術を終わり、やっと口が利ける状態でベッドの下から遺

言状のコピーを取り出し読むことを要求する。そこにはこの会社を手伝うことを前提にしているいろいろなことが書かれていた。社会人としてのスタートに当たっての基礎教育、そして高等教育をしてくれた恩義有る日立が設立した会社、一方では明日にでも死ぬかもしれない先輩を前にして、要請を断ることは出来ず、その場でピンチヒッターとして一時的にでも手伝う覚悟をした。そこで帰国後社長を務めることになっていた京都の本社に電話で辞職願をし、その返事を待たずにこの会社への出社を始めた。すでに48歳。またしても予期しなかった運命の転職であった。

2.9 バブル経済に浮かれる日本、日本の企業はおかしい

1987年、アメリカから帰国してみた日本には異常な活気があった。1980年にアメリカ人が書いた‘Japan as number one’なる本が発行されて以来、日本経済は破竹の勢いで企業も個人も皆金儲けに夢中になって居た。アメリカという外から帰ってきた私には、この異常さを見て、1979年にアメリカへ会社つくりに行った時に感じたと同じ様に、「これで国民が幸せになれるのか？」という疑問が湧いた。このことはそのまま日本企業のあり方への疑問であった。「経済発展を支えるのは企業。日本企業はおかしい。いまこの設立して2年半しか経っていない未熟な会社の経営を担うことになった。この異常な日本企業と同じになってはいけない。」そこで単なるピンチヒッターではなく、この会社のあり方を根本から見直し、新しい考え方の会社に育てることを覚悟した。まずは会社としての基本姿勢を「会社と社会の関係はGive & Take」と定め、目指すべき経営は「生き残る経営ではなく、いつ倒産してもよい経営」を目指す。「売上高や企業規模の拡大を追求するのではなく、自立した良き社会人としての社員育て」を目指す。「儲かる仕事より、儲からないが社会の役に立つ仕事を儲かるようにする経営」とし、3つの経営理念を持った理念経営に徹することにした。それらは

- ① 社会に役だつ仕事をしよう。
- ② 社会に役だつ活動をしよう。

③ 社員と共に良き市民になろう。
というものである。そのうえで日立幹部と交渉し、大企業へのぶら下がりから抜け出し、独自経営、天下りの受け入れをしない企業としてすでに28年、「当社の常識は一般企業の非常識」と公言してやまない企業になった。その道のりは決して順調なものではなく、大変リスクの高いものだったが、それでも常に配当を続ける無借金経営の会社となった。その詳細は当社ホームページのコラム欄掲載の「実験企業日本コンピュータ開発」をご覧ください。

3. おわりに・・・生まれて74年、社会人としての55年を振り返って

長期低迷する日本経済の中で、大人達だけでなく子どもたち、若者達までもが元気も勇気も、自信も無くしている。学業を修了して新たに社会人となる就職に当たっては、夢と希望、勇気と意欲を持って、意気揚々と社会に出てきてほしいと思う。しかしながら現実には、明るく逞しい若者らしさより、草食系などと揶揄されるように、暗くてひ弱な、どこともなく自信のない若者像が目につく。就職活動する若者達の多くは、自分がこれから生きて行く社会や人生についての知識はなく、一方的に自分勝手に想像し、思い込み、その社会を利用して自分の好きなことをして楽しみながら、自分だけの安心安定を求めて、その要求を満たしてくれる職場探しに奔走している。この世界一恵まれたすばらしい国日本に生まれながら、次代を担う若者達がそのことに気づかず、それを維持発展させることに興味も持たず迷走している。

その原因、背景には、「子どもは親の背中を見て育つ」という日本の古くからの教えを忘れ、背中を見せることを忘れ、あるいは見せるべき背中を持たない大人達の存在があるように感じている。その罪滅ぼしの一環として、私は自分の歩んできた、リスクに満ちた道を振り返ってここに綴り紹介した。

私は83歳で死ぬものと覚悟している。父親も、長兄も、そして次兄も83歳でこの世を去ったからである。人が死ぬことは生まれた時からわかっている。

死は決して悲しいことではなく、人生のゴールである。それならば私は、あのオリンピックでのマラソンのゴールのように、あるいは箱根駅伝でのゴールのように、拍手喝さいの中で人生のゴールに飛び込みたい。自分から「サヨナラ！」と行って何も持たずに行きたいものである。その為にやるべき最後の仕事は、自分の人生経験やそこから学んだことを纏め、次代を担う若者達が自分の人生を考える時の参考となる様に伝えることだと思う。

私の人生は一般の人達に比べればリスクが多く、決して幸運ではなかったかもしれない。しかし私は若い頃から「反省はしても後悔はするな」と肝に銘じて、全力で生きてきた。その自分の人生に悔いは無い。そして今振り返って、自分の人生を性格づけてきた要素を次のように思う。

① 貧しい時代に、貧しく育てられたこと。そういう育て方をしてくれた親兄弟に感謝したい。

このお陰で、小さなことでもうれしく、感動し、感謝できる。また機会が与えられると喜んで勉強もし、苦しくても簡単にギブアップすることもない。

② 社会への第一歩で、古き良き時代の、日本企業の社内教育を受けたこと。しかも若くしてその大企業を離れ、厳しい中小企業に出る機会を与えられたことで、大企業病にならなかったこと。

③ 田舎者で要領が悪く、難問にぶつかってもそれを回避する術も、知識も持ち合わせていなかった為、逃げ出さずに真正面から取っ組み合いをするしかなかったこと。

そして、これまでの人生体験から自信を持って言えること、それは

① 「リスクの有る人生にこそ面白さがある！」

② 「リスクの有る仕事にこそ遣りがいがある！」

③ 「差し障りのある話にこそ聞く価値がある」

人生には言い訳無用。如何に立派な言い訳理由を見つけても、それで自分の人生が良くなるわけではない。自分の人生は、自分にしか与えられなかった、自分でしか生きることが出来ない、世界でたった一つの人生。人生は、自分が一生を掛けて創り上げる芸術作品である。